

祖父の梅の木

結城文

おじいさんの梅の木が倒される日

朝早くから

ギーイツ　ギーイツと尾長が鳴いた

はじめに白加賀が倒された

鬱蒼と幾重にもかさなった深緑の葉むらが消え

ぽかんと隣家の裏口までの空間があいた

根だけで二トンもあったそうな

年毎に薄紅色の花をつけた豊後梅が

次に倒される

フェンスの向こう

逆光に黒ずんだ葉むらが

痙攣するように空にゆれた

それがおじいさんの梅の木を見た最後

尾長が二羽やってきて

戸惑ったように我家の庭木にとまってた

おじいさんの野梅に

群をなしてきていた尾長たちは

その後姿をみせない

もうここに寄ってもしかたがないと知ったのだ

ひらり ひらりと水平に

青灰色の線を描いて飛んでいた尾長たちよ

お前の黒いボンネット

喪ったのは梅の木だけではなかった

尾長も鶉も椋鳥もみんな姿をみせなくなった

木がなくなつて 鳥がこなくなつて

ぽかっと

ひらいた空間に

まだなじめない私がのこった